ふたりで、ドライブ

早海徒雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふたりで、ドライブ

【Ｎコード】
Ｎ５４１１ＢＡ

【作者名】
早海徒雪

【あらすじ】
萩原綾は、かつてはアイドルとして華やかな芸能界で活動していたが、今は精神を病んで帰郷し、ずっと引きこもり生活を送っている。綾の親友・奈津子の弟・悟は、そんな彼女を心配し、毎日のように綾の元を訪れ、励まし話し相手ともなっていた。そしてある晩、ふと気まぐれに「外へ出たい」と言い出した綾のために、悟は彼女を夜のドライブへと連れ出すのだった。道中、不安定な精神状態のまま、ワガママばかりの綾に振り回されながらも、それらすべてをしっかりと受け止めていく悟。やがて、頑なだった綾の心に変

化が訪れはじめるのだが、それはあくまで、ほんのつかの間の出来事にすぎなくて……。

その一

「……」
「……」
「綾さん」
「……」
「……もう通りにまで出てきましたよ、綾さん」
「……」
「そんなに、たいしたことじゃなかったでしょう？」
「……」
「エンジンが温まるまでは、スピードもだしませんから、安心してください」
「……」
「なるべく安全運転するよう、心がけますんで……」
「……」
「でもまあ……その、あまり緊張しないで……」
「……」
「……」
「……」
「あの……綾さん？」
「……無理」
「えっ？」
「無理無理無理。やっぱり無理」
「綾さん……」
「あたし、もう、ダメ。耐えられない」
「……」
「頭痛い。寒気もする。気持ち悪くて吐きそうだし、身体中ひどくかゆくてたまんない……」
「……」

「早く……帰りたい」
「……『外へ出たい』って言い出したのは、綾さんの方ですよ」
「だからもういい。一瞬でも外の空気吸ったんだから、もういいでしょ」
「……」
「……帰る」
「……」
「か・え・る！」
「……」
「……」
「……そうですか」
「……」
「じゃあ、Uターンしますね」
「……」
「でも、こいつ、バカでかいんで、ちょっと手間がかかりますから」
「……」
「あの車が通り過ぎるまで、もう少し待ってくださいね」
「……」
「もう、いいかな……」
「……」
「よいこらせっと……」
「待って！」
「はい？」
「やっぱり、やめて……」
「……」
「帰るの……やめて……」
「……」
「しばらく、このまま……」
「……了解です」
「……」

「……」
「……ごめん」
「いやあ、いいですよ」
「ホントに……ごめん」
「いいんですって」
「……」
「でも……あんまり無理しないでくださいね」
「……うん」
「……エアコン、少し暑すぎないですか？　キツいようだったら、いつでも言ってください」
「……うん」
「……」
「……」
「……あ、満月」
「……」
「綾さん家に立ち寄った時は、まだ曇り空だったんですけどね」
「……」
「今は、あんなに星も輝いて……」
「……」
「綾さんが久しぶりに外へ出てきてくれたんで、お月さんも歓迎してくれたり……なんかして」
「……」
「ハハハ……」
「……」
「……スンマセン。つまんないことを言って」
「……」
「でも……ホントにきれいですよ。月も星も……」
「……」
「ちょっと顔を上げて……見上げてみたりなんかしたりしません……か？」

「……」
「……どうでしょう？」
「……」
「……」
「……キャッ！」
「えっ？　えっ？」
「……」
「……」
「もう……やだ……」
「どうかしました？」
「たった今、通り過ぎていった車が、それを運転していた奴が……あたしをにらみつけて行ったの！」
「……えっ？」
「あいつ！　あいつよ！　……ああん、もう、見えなくなっちゃった。あいつ、あたしを見た！　そして……笑った。笑ったのよ、あたしを！」
「……」
「せせら笑った！　バカにしたような顔して……間違いない。間違いないもの！」
「……」
「ホントよ。ホントだもん！」
「……」
「……」
「……スンマセン。その……気のせいかと、思います」
「ホントだったら！」
「……じゃあ、それって、どんな車でしたか？」
「……どんなって……」
「車種まではわからないと思いますけど……大きさはどうでしたか？　この車と同じぐらいでしたか、それともフツーぐらい？」
「……フツー……だと思う」

「普通車ぐらいの大きさだったら……その車の運転席からすれ違いざまに、こっちの車の助手席に乗っている人間をにらみつけようとすると……かなり首を伸ばして、見上げるようにしないといけないかと思うんですけれども」
「あ……」
「……わかりました？」
「……」
「こっちからは、にらんでいる様にも見えたのかもしれませんけど、あっちからは、車体や俺なんかの陰に隠れて、綾さんの姿かたちまでは、はっきりと見えていませんよ」
「……」
「まあ、ばかでっかいことだけが、俺とこの車の特徴でもありますんで……」
「……」
「安心……しました？」
「……うん」
「そうですか……」
「……」
「……よかったです」
「……」
「……」
「……そうだよね。誰もあたしのことなんか、気づくわけがないよね」
「綾さん……」
「あたしのことなんか……」
「……」
「……」

○

○

「……」
「……」
「綾さん」
「……」
「その……どうですか、気分の方は」
「……」
「また、気持ちが悪くなったりしていませんか？」
「……大丈夫」
「じゃあ、少し遠出してみませんか。バイパスの方とか……」
「……」
「あそこなら、かなりスピードも出せますんで……」
「……」
「その……気分もスカッとしますよ」
「……」
「……」
「……」
「……綾さん？」
「……うん」
「……」
「……」
「……あの、どこか行きたい所があったら、言ってくれていいですよ」
「……」
「俺……どこだって行きますから」
「……ホントに？」
「ええ」
「じゃあ……」
「……はい」
「……東京……」
「えっ？」

「『東京』よ。大都会『東京』……花の都『東京』……」
「……」
「今、『どこだって行きます』って、言ったわよね」
「……」
「……」
「……」
「……ウフフ」
「……」
「アハハハハ……」
「……」
「……キャッ！」
「……」
「な、何よ……ちょっとした、ジョークでしょ！」
「……」
「ねえ、やめて。こんなところで、スピード出さないで」
「……」
「やだ……お願い……」
「……」
「イヤッ！　危ない！」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……いいんですか？　相当とばして行かないと、いつまでたっても、東京なんかにたどり着けやしませんよ」
「……」
「まあ、そうは言ったって、どんなに急いでも、高速を使ったとしても、着くのは明日の夕方ぐらいには、なっちゃうんじゃないですかね」
「……」

「無事に着いたからといって、きちんと細かく道案内してもらわないことには、どこに何があるのかとか、全然知りませんから。なにぶん、はじめて行くところですからね」
「……」
「でも……そんなにいいところなんですかね、東京なんて」
「……」
「……」
「……」
「俺には、理解できないですけどね……」
「……」
「……」
「いいところなんかじゃ……」
「……」
「いいところなんかじゃ……ないわよ」
「……」
「東京なんて……」
「……」
「……」
「……」
「『最悪』の場所だわ」
「……」
「……」
「……じゃあ、なんで、そんなところに行きたいなんて言うんですか」
「……」
「どうして、そんなところに戻りたいなんて思うんですか」
「……」
「……綾さん？」
「……ごめん」
「……」

「……ごめん。勝手なことばかり言って」
「……」
「……ホント、ごめん」
「……いえ」
「……」
「いや、俺も、綾さんを責めたり、悲しませたりするつもりは……」
「……」
「俺の方こそ、スンマセンでした」
「……」
「……スンマセン」
「……」
「……」
「……」

○

○

「……」
「……」
「……」
「悟は……」
「えっ？」
「……行ってみたいと、思わないの？　東京……」
「……」
「ああ、ううん。違うの。あたしが戻りたいからとか、忘れられないからとか、そういうことじゃなくてね……」
「……」
「……若いうちに、行っておいた方がいいんじゃないかな、ってちょっと思っただけ」
「……」
「進学しようとか思わなかったの？　東京の大学とか」

「いやあ、俺の頭じゃ無理ですよ。高校だって、ギリで滑り込めたぐらいなんですから」
「……そうなの？」
「はあ、まあ……ハハハ」
「……」
「今の仕事だって、まとまった休みも取れそうもないし、なかなか県外まで、遠出するのも難しそうですからね」
「だけど、車でなくってもいいわけでしょ。飛行機なんかだと、あっというまに着くじゃない」
「……」
「……こっちとは、別世界よ。人もモノはもちろん、時間や空気だって違うわ。だって、何でもあるんだもの。手を伸ばせば、届きそうなところに」
「でも……いいところじゃないんですよね……」
「……」
「……」
「……そう『思った』だけよ」
「……」
「手を伸ばせばすぐに届くと『思った』んだけど、そう簡単には、触れることすらできなかったってこと」
「じゃあ、『何もない』のと、同じじゃないですか」
「……」
「……」
「……そうかしら」
「そうですよ」
「……」
「……それなら、俺はやっぱりいいですよ……東京なんて」
「……」
「俺は好きですよ、生まれ育ったこの街が」
「東京でなくてもいいのよ。どこか別の場所……ここではないどこ

かへ、誰も知らないところへ、行ってみたいとは、思わないのかしら」
「……」
「……どう？」
「そうですね。それもいいかもしれませんけど……」
「……」
「出て行きたいのは……どこか遠くへ行きたいと願っているのは、やっぱり綾さんの方じゃないんですか……？」
「えっ……」
「……違いますか？」
「……」
「……」
「……」
「……スンマセン」
「……」
「そんなに……悪いところだとは、思わないんですけどね。この街は」
「こんなかび臭い街……退屈で退屈で、息がつまりそうだわ……」
「だけど……帰ってきたじゃないですか」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……他に行くところがなかっただけよ」
「……そうですか？」
「……そうよ」
「……」
「……」
「俺……」
「……」

「……綾さんがこの街を『退屈だ』って感じるのは、こっちは時間の流れがゆったりしているから……だと思うんですよね」
「……」
「でも、それって、そんなに悪いことかな……とも思うんですけれども」
「……」
「その……リハビリしたり、キモチや体を休めるには、逆にうってつけだと、考えられませんか？」
「……」
「どう……ですかね」
「……」
「……」
「そう……かもね」
「……」
「悟がそう言うのなら……そうなのかもしれないわね……」
「……」
「きっと……悟の言ってることの方が……正しいんでしょうけどね……」
「綾さん……」
「……」
「……」
「……」

○　　○

「……」
「……」
「……」
「あたし……」
「……えっ？」

「これから、どうなると思う？」
「どうなるって……」
「ああ、そうか。言い方がヘンだよね」
「……」
「あたし……どうすればいいと思う？」
「……」
「だって……いつまでもこのままじゃ……」
「そんなに……あせることは、ないんじゃないですか？　だから、時間もかけてゆっくりと、キモチを直していけば……」
「だって、もう戻ってきてから、どのくらい月日がたった？　その間、あたしはいったい何をしてた？　何もしてないでしょ。何もしないで、ダラダラと毎日を過ごすばかりで……」
「……」
「無駄に年だけ重ねて……あたしもう二十六だよ。二十六にもなって……昔と違ってこんなにブクブク太っちゃったし、顔にはしみや吹き出物もいっぱいで……もう、どうしようもないよね」
「そんなことないですよ……見かけも、以前とたいして変わっちゃいないし……なにより、これからじゃないですか。できることだって、まだまだいっぱいあるじゃないですか」
「無理だよ……」
「……」
「無理……」
「……」
「……」
「……俺、思うんですけど」
「……何？」
「その……あんまり考えすぎなんじゃないですか」
「……」
「物事を、悪い方悪い方へと、捕らえすぎじゃないかと……」
「……」

「いまどき、不況なんですから、一年ぐらい仕事にあぶれることなんて、ざらにあると思うんですよ。それに綾さんは……病気……でしたから、それはそれで、ちゃんとした理由があってのことじゃないですか」
「……」
「そりゃ、綾さんの仕事は……特別……ではありましたけどね。でも、逆に言えば、もう、辞めてから一年以上もたったわけじゃないですか。昔のことを思い返して、今さらあれこれ悩んだり苦しんだりする必要もないと思いますよ」
「……」
「それにこっちは、さっきの話じゃないですけど、なにぶん田舎ですからね。それほど人の目を気にしないでも、みんな忘れてしまっていますよ」
「……そんなことない」
「綾さん……」
「あたし、このあいだ、ケータイから検索してみたの」
「……検索？」
「……あたしの名前で、あたしの昔の芸名で。そしたら……そしたらどんな結果が出たと思う？」
「さあ……わかりませんけど……」
「最初にヒットしたのは、事務所の命令で無理やり書かされていたブログ。まだ削除してなかったの、ってあきれたんだけど、最後の日記のコメントのところが、なぜか百件以上にもなっていたから、おそるおそるそこも開いてみたの。そしたら……」
「……」
「……信じられる？　今でも誰かが、マメにあたしのことについて書き込んでいるの。それも昔のあたしのことじゃない、『今』のあたしのことについて……」
「……」
「『萩原あーやは、ニートになった』とか『もはやアイドル時代の

面影はなく、見るも無残な姿になった』とか……どこで見ていたの、なんで知っているの、ってことばかり……」
「そんなの……適当ですよ。よくある誹謗中傷じゃないですか」
「そんなことない！」
「綾さん……」
「こっそり田舎に引きこもっていても、息をひそめて隠れていても、誰かがあたしを、ずっと見張っていて、物笑いの種にしているんだわ」
「……」
「あたし……怖い……」
「……」
「……」
「あの……」
「……」
「……そこのブログは、すぐに閉鎖してもらいましょうよ。もう意味のないページ、みたいですから。前の事務所に頼んで……綾さんが話したくないっていうのなら、俺が変わりに連絡しますから……」
「ダメ！　そんなことしたってダメよ。そこがなくなっても、どうせどこか別のあやしい掲示板とかに、書かれるだけだもん」
「……」
「あたしは結局、アイドルだった過去を、きれいさっぱり捨て去ることなんてできないの。そしてそれは、あたしの未来までも侵食していくつもりなんだわ」
「……」
「顔を変えるとかして、まったくの別人にならない限り、あたしは、普通の生活になんか戻れないのよ……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「……俺は、ネットもやらないし、そういうところに書き込む連中の気持ちなんてわからないですけれども」
「……」
「全部が全部、そんな人たちばかりじゃないですよ、きっと。そういう奴らは目立つから、大勢いるように見えるだけで……」
「……」
「俺は、そういうのは、きっぱり無視しちゃった方がいいと思うんですけどね」
「……」
「……」
「……」
「だいたい……綾さんって、そんなに悪いことしたんですか？」
「……」
「アイドルやっていた時は、みんなに夢を与えていたじゃないですか。楽しませてくれたじゃないですか」
「……」
「俺に言わせれば、綾さんは加害者じゃなくて、被害者ですよ」
「……」
「『被害者』の方が息を殺して、ずっと隠れていなきゃいけないなんて、間違っていると思います」
「……」
「……」
「……正論ね」
「えっ？」
「悟のご意見は、いつも、正しいことだわねって、言っているの」
「……」
「ホント……イヤになるぐらい……」
「……」
「……しょせん他人は、好き勝手なことしか、言わないのよね」
「綾さん……」

「あたしの気持ちなんて……誰にもわかってもらえないんだわ……」
「……」
「……」
「じゃあ、なんで、その『他人』に、『これからどうしたらいい？』なんて、聞いたりするんです？」
「……」
「『他人』だったら、もっとキモチのいいことを、言ってくれると思いましたか？」
「……」
「『どうなると思う？』だなんて……そんなもん、なるようにしかならないに決まっているじゃないですか」
「……」
「『わかってもらえない』のも、当然ですよ。聞く耳持たないんだから……」
「……」
「綾さんがそう頑なだと、俺は……俺からはもう……」
「……もういいわ」
「えっ？」
「……もういい……」
「……」
「もうこの話は、これで打ち切りよ……いいわね」
「……」
「……いいわね？」
「……え、ええ……」
「……」
「……」
「……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5411ba/

ふたりで、ドライブ

2012年1月14日22時53分発行